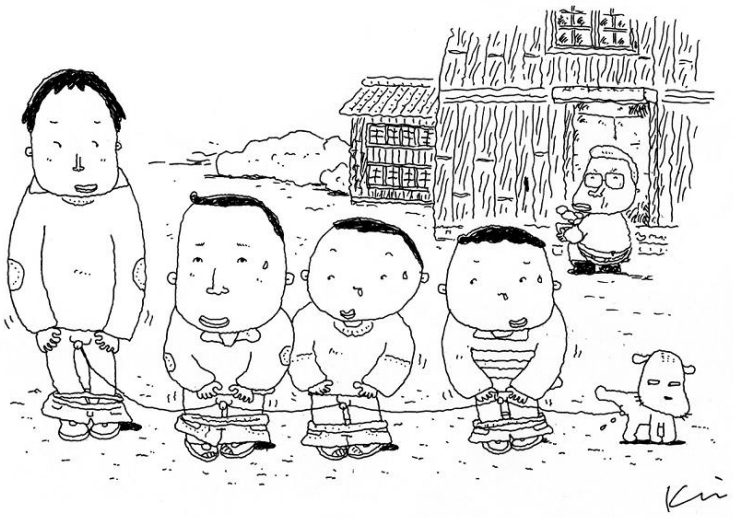
新年あけましておめでとうございます。
昨年お寄せいただきました沢山のご厚情に
心よりお礼を申し上げます。

私が小学五年生の悪戯盛りのころ。理科の実験で乾電池を使って豆電球を点灯し、「並列」や「直列」を勉強していた頃のことです。仲間数人と先生の目を盗んで「電柱遊び」をしていました。教材に使う五メートルほどの銅線を、まるで路傍に立ち並ぶ電柱を伝うケーブルのように、四人の仲間のチンチンにくくりつけ、授業中に引っ張り合って遊ぶというものです。坂田君、西原君、楠原君、そして私。四人の股間をつなぐケーブルは、悪ガキ仲間の友情や連帯を証（あか）す絆のように思えたものです。

ある日の授業中。いつものように西原君のズボンに隠れた、男子のもっとも敏感な器官に、きょうは二本の銅線がつながりました。その日、私は父親の工場でこっそり作った、大量の乾電池が納まった容器を隠し持っていました。私は仲間と目くばせをしたのち、銅線を容器の接点に一気に接続しました。

「！！！」。西原君の悲鳴が教室じゅうに響きました。成功！成功！と叫ぶ、坂田君、楠原君。

担任の安田先生が黒板の前から飛んできました。仲間四人は思い切り先生の鉄拳をくらったあげく、同級生たちにからかわれながら、そろって廊下で何時間も立ちつくすことになりました。



＊

昨年十二月、私の会社にとっては久しぶりの新製品が完成しました。お好み焼やホットケーキ、ハンバーグなどを電気を熱源として鉄板加熱調理する「自動焼成機」です。全長約六メートル、幅一・七メートル、総重量およそ二トン。熱源とする総電力は六〇キロワット。家庭用のホットプレートなら、同時に一〇〇台ほどで調理すると同じ焼成能力をもっています。工業用の電磁誘導加熱コイル（ＩＨ）で鉄板上の調理品を短時間のうちに加熱し、強力な火力と殺菌力をもつ特殊な遠赤外線が照射されます。

その昔、父の経営する電気バリカン製造工場では、特殊鋼で作られる刃、電磁石、プレス加工品など、ほとんどの部品は自社の工場内で職人達によって手づくりで製作されていました。日本の敗戦まもなくの頃で、鋼（はがね）や電気部品などの調達もままならず、他社に加工を頼ることも出来なかった時代。原爆の廃墟からよみがえり、以来広島で進化し続け、蓄積された機械工業技術によって、今では高度な「分業化と専門化」の時代が到来しています。洗練されたビジネスモデル（商業化のアイデア）や確実な販路、資本などの条件さえ整えば、中小零細企業でも日本国内で望みうる、最高レベルの技術を結集した機械製品を製造することが可能な時代になりました。

このような周辺技術の蓄積と関係者の高度な知識と経験、そして事業に携わる人のひたむきな情熱によって、新しい価値をもった産業機械がこのたび生まれました。

私の会社のスタッフをはじめとして、常に我々を支えて下さる協力会社を含めて、開発・製作・販売の作業に関わるすべての業務を網羅し、今回の事業に直接関わった方々の人数を関係者からの聞き取りをもとに書き出してみました。

＜開発・設計・製作・販売＞

①商品コンセプト（どのような機械商品にするかという概念）の決定。技術課題の整理、分析、調査　六名

②当社の食品生産部門「味感工房」でのデータとり、器具を使った基礎実験。　二名

③概要の設計　五名

④グラフィックデザイナーによるパース(完成予想図)などの制作　一名

⑤部品図・組み図など機械の本格設計　五名

⑥電気回路の設計　三名

⑦各種部品の機械加工・製作　三名

⑧金属薄板などの板金加工　三名

⑨電気制御盤や機械の配線工事　三名

⑩塗装工事　一名

⑪全体組み立て工事　五名
⑫関連資材の商社・特殊機器メーカー　（二十一社）
⑬機械の納入先への陸上輸送および
　工場への搬入・据付工事　十名
⑭試運転・現地調理試験（納入先スタッフ含む）　二十一名

＜関連業務＞

⑮当社および主要協力会社の総務事務担当者　六名
⑯特許調査および申請業務担当の弁理士　一名
⑰完成写真を撮影するカメラマン　二名
⑱所管官庁（二省庁）職員　二名
⑲工場の熱環境などの評価に協力して
　くださった地元電力会社、大学関係者　四名
⑳販売資料を制作する広告代理店スタッフ　三名
㉑機械の販売関連の商社担当者　二名

合計　八十八名
および関連資材の商社および特殊機器メーカー
二十一社

この他に、副次的な業務として金融機関担当者や報道関係者が加わります。これほど多岐にわたる工業技術や各種の専門家たちのほとんどが広島市周辺でたちどころに動員でき、しかもそれらの連携作業が特別なトラブルもなく整然と進んで結実することは驚くべきことのように思えます。

あらためて日本人の素晴らしさと底力を再認識するとともに、これからも世界を相手に堂々と立ち向かえる広島の実力を実感しました。

機械の最後の調整を終え、試運転も無事すんで、納入先の食品会社へ出荷するまでの数日。コンセプトの議論開始から完成、出荷までおよそ二年半、一貫して主要任務にあたってくださった協力会社の老練技術者、道中部長が、完成した機械のそばに常に付き添い、時折ステンレスのボデーを手でさすりながら、機械にむかって何ごとかつぶやいていた情景が私には忘れられません。

この機械は一ヶ月もしないうちに顧客の工場で一日何千食という調理食品を産み出し、各地の店頭に商品を送り出す母なる機械として稼動を開始します。

昨年も沢山の人と、心揺さぶる出来事に出会うことができました。
今年も、敬愛し、素晴らしい感性をお持ちの方々に「おじさんの青春日記　その11」をお届けできたことを感謝いたします。
みなさまのご健康をお祈り申し上げます。

二〇〇七年（平成一九年）　正月

里吉賢司

■年末の冊子上梓がかなわず、年明けの完成、配本となる予定です。お詫び申し上げます。